

ふるさと風

第53号 (2010年10月)

風に吹かれて (33)

白井啓治

『目には紅色花 心には白色花』

これはあらゆる文化・芸術表現の分野において共通して言える事なのであるが、そこに赤い花が咲いているとして、健常者であれば目には赤として認識することが出来る。しかし、それを表現する時に、赤い花だから絵であれば赤く色を塗り、文章であれば赤い花と書くのかといえ、決してそうではない。

赤く咲いた花を見て感動した。しかし、その感動した心に映った色は赤でないかもしれないのだ。理屈っぽくなるが、感動を導いた花の赤い色は、感動の心には燃え上がるような黄色として認識していたかも知れないのだ。文化・芸術的自己表現とは心に映った感動としての真実の色を追究し、その追究した色を自分の表現として塗る、或いは書くことを言うのである。

真理を追究する人達は「事実の先にある真実を求め探る」という事を言う。一般に、事実が突きとめられたら、それで一見落着いて考えてしまう。物は高い所から低い所に向かって移動する、とは今それを見ている事の実を表現したもので、それは間違った表現ではないが真実を表現したも

のではない。物が落下するという事の実とは、引力の働く方向(影響を受ける方向)に物が移動する、ということである。決して高い所から低い所に落ちるのではない。真実とはこういう事を言うのである。

だから目に映った色は赤と定義される光の波長であるが、それを感動として心に感じている色は人それぞれに違っているのである。一面黄色に咲く菜の花の畑を見て大いなる感動を受けたとして、その時の感動を表す色は真赤であったとしても何の不思議もないし、真つ赤な菜の花畑の絵を描いても可笑しくもなんともないのである。

赤い菜の花畑を描いた子供に、菜の花は黄色なんだから黄色く塗りましょうね、なんて馬鹿な大人の実に多い事か。そして、この馬鹿な大人が、将来性のある子供達の才能の芽をドンドン摘んでしまっているのである。

新人賞の審査をするとき、その尺度となる最も重要なものは、既成を打ち破る力の有無である。決してそのジャンルの技術力を問うものではない。既成を打ち破る力とは、発展を約束するものであり、発展とか、進化とか、夢というのは、現状を破壊する、既成を打ち破る事でしか成し得ないものである。

こんな事を改めて又、ここに書いたのは、事実

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会の会報もお陰様で53号となりました。

当会では、ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

の先にある真実、ということを常に忘れず、物事に確り対峙していないと、つい楽な事実としての知識を振りかざしてしまう事になるからである。真実の探求はふるさと文化の再発見と創造を謳う風の会としては、決して忘れてはいけない軸である。

夏は、昔懐かしい蚊帳を吊って、健やかな睡眠。これぞ、正にスローライフ。エアコンをブンブン、うならせるより、はるかにエコで風流だ。しかし、近年はそれも、夢のまた夢。

特にこの夏は、記録のある過去113年間で一番暑く、平年と比べ、列島は平均1.4℃も高かったという。理由は太平洋高気圧の上にチベット高気圧の重層張り出しが強く、涼しい空気をもたらす偏西風が、北に偏りすぎたためだという。熱帯夜・猛暑日の連続。全国で6〜8月中に、熱中症で475人も亡くなったそうだ。エアコンなしには、熟睡などできなかった。これも、私がいつも書き続けている、温暖化現象が、急進している現れなのであるだろうか？

温暖化は、海水面の上昇や、熱帯病の中緯度地帯での蔓延等の心配はあるが、今の今、自分の身に迫った苦痛ではなかった。しかし今夏の猛暑は格別。世界各地で激甚災害。ロシアでは旱魃で、泥炭層が自然発火し、森林火災が市街地まで襲った。グリーンランドでは、氷河が海面にせり出し、氷山として北大西洋を漂流し、2〜3年は消滅しないという。1912年のタイタニック号の災難を思い出す。

一方、身近では日照りで野菜は育たず、熱中症で多くの人が倒れ、光熱水費が急上昇と来てはチヨイト穏やかではない。固いこと言うようだが各自、毎日の小さな事の積み重ねが、結局こんな形で「逆襲」として自分に跳ね返ってくる。そう考えれば、日頃の生活態度に細かい神経を使い、温暖化の原因を、それぞれが、自ら減らしていくし

かないであろう。何もかにも高速時代だが、スロウダウンが肝要。

2010年8月20日、読売新聞のコラム「編集手帳」にこんなのがあった。正岡子規は蚊の攻撃に難儀し、『刺客蚊公之墓碑銘』という一文で蚊を断罪する。血を吸うのは殺生罪、蚊帳の穴をくぐるのは偷盗(ちゅうとう)とう・どろぼう)罪、耳にうるさい羽音は妄語(もうご)うそつき)罪、酒の香を慕うのは飲酒罪。『汝の一身は総てこれ罪なり』と断罪する。確かに蚊は凶悪犯だ。日本脳炎を媒介するコガタアカイエカ、マラリアを媒介するハマダラカなど、正に殺人鬼だ。強力殺虫剤に耐性を持つハマダラカも増え、今、世界でマラリア感染者は2億人いるが、その中、毎年マラリアにより20万人もの人が殺されている。マラリアには、いまだにワクチンはない。途上国に蚊帳を十分に送れば、多くの命を救える。

一方、同コラムの紹介によると、落語『唐茄子屋政談』には、『蚊帳いらす』といわれる人物が登場する。「猫いらす」なら聞いたことがあるが、「蚊帳いらす」とはなんじゃいな？ それは、どうにもならないバカ息子を、蚊が刺して血を吸ったら、バカが感染するので、蚊の方が、敬遠し、刺しはしない。即ち、バカ息子には、蚊帳などいらねえよ！ と、親が息子をののしる。というわけ。

実は私も、「蚊帳いらす」の類かもしれない。以前にも書いたJICAの国際協力事業で、中米ホンジュラス国に滞在したが、日本人常駐は4人で、3年間に出入り計14人中、マラリアに感染しなかったのは、私一人だけであった。蚊のヤツ、こんな男を刺したら、バカが感染すると、敬遠したのか？ 他の男女13人は、全員やられたというのに。

どうやら私はクソまじめな方で、出国の際、JICAから言われた、マラリアにかからないための熱帯滞在中の生活基本原則を、忠実に守り通したためだと思われる。即ち、①どんなに暑くとも腕や首、脛など素肌を出さない②アルコールを飲んだら、フラフラ屋外を歩かない③部屋では日本から持っていた「蚊取り線香」を常時燃やしておく④処方されたマラリア原虫の増殖を抑えるクロキシン剤を、毎日確実に飲み続ける…。この4原則を私は、ほぼ忠実に守り通した。

【滞在中私はカリブの楽園・ロアタン島で、ヤシの木に吊るしたハンモックに揺られ、故郷を偲び、満天の星空を仰ぎながら、テキーラに酔いしれ、ボケッと過ごした夜もあればあった。セカセカ人生の時計を一瞬止め、長年夢見た幻のひと時を満喫することができた。蚊に刺されようが、サンリにタッチされようが朦朧としてハンモックに揺られる。これぞ正に、我が人生最高の至福の時であった。

しかし、天空の回転に伴い、忘我の時も覚めてくると、マヤ文明の盛衰に思いを寄せる。彼等は我々と同じモンゴロイド。氷河期に今より海水面が90%も低いベーリング地峡を渡り、新大陸へと進出した。そしてかの偉大なるマヤ文明を築いた。しかしコロムブス以前にマヤの文明は衰退した。ところがその後がいけない。押し寄せたヨーロッパ列強の非道な侵略。南北米大陸900万人の先住民の、なんと90%を殺害して、彼等の郷土を占領した。

ヨーロッパを飛び出し、新天地を求めた冒険心はよいとして、その後の先住民対策は無謀そのもの。非道極まりない。毛皮や財宝など奪い放題。

インディアンの食糧であったバッファローを、狩猟の趣味として殺しまくり、更にインディアンを根絶やしにする為、兵糧攻めとして、バッファローを殺しまくった。数千万頭いたと思われるバッファローが、ついに数百頭になり、やっと愚かな白人どもも、「絶滅」に気がつき、殺戮を中止したという。これは、太平洋のクジラを白人どもが、獲り尽くし、やっと絶滅に気がついたのと同じこと。ペリーが浦賀に来て交易を迫ったのは、何のことはない。長い捕鯨航海の新鮮な野菜や水や薪が必要だけのことであったという。今、グリーンピースとやらが、過去の自分達の悪事を棚に上げ、無茶な捕鯨反対運動をしているが、チャンチャラおかしい話である。極悪非道を重ね、その末裔が今、世界の大国にのし上がったとしても、その歴史を思う時、尊敬の念など、微塵も湧いてこない。人類の（特に肉食主体の）大脳とは、どのような方向に向かって進化を続けているのかと、しばしば、呆然としたのを思い出す。折角のテキーラも、悪酔いの呼び水になってしまった。」

さて、話を戻し、あのクソ暑い熱帯で、マラリアから身を護るため、半ズボンも半袖も着られない。単身赴任だ。夜の街にフラフラ出かけたくなる。航空便で日本の蚊取り線香を送ってもらい、切らさないのは大変なことだ。それに具合悪くもないのに、毎日薬を飲み続けるのも、かなり苦痛なことである。しかし4原則を守り通した勲章として、私一人だけ、マラリアに感染しなかった。蚊が私を避けたのではなく、近寄れなかったのだ。

滞在中、同僚の寄生虫学者は、自分自身がマラリアに感染し、自分で自分の血液を塗抹染色し、顕微鏡でマラリア原虫を確認し、『この目で見た』

と興奮していた。学者とは：まあ、呆れたもんですね。

さて、私がマラリアに感染していなかったことは、帰国後、すぐ証明されることになった。それは、突然私が「前立腺癌」になり、手術することになったからである。手術するためには、熱帯滞在経歴上、エイズとマラリアに感染していない証明が必要とのこと。筑波大病院は、最初から私を疑ってかかっている。しかし、エイズ感染の否定は簡単にできたが、マラリア感染の検査は、簡単にはいかず、長い時間を要したが、結局、「陰性」は確認された。

エイズ感染については、現地で色々な誘惑があり、守り通すのは簡単なことではなかった。ベッドメイキングのホテルの女中など、虎視眈々。夜の街角なんか、藤原紀香なみの美脚をちらつかせ、美人娼婦が袖を引く。遊びを知らぬカタブツの田舎者は、ただただ逃げまくるだけ。そして私は、床屋でも、カミソリは新品を要求した。エイズ患者に使ったかもしれない剃刀など：たまったものじゃない。

【蚊にまつわる話をもう一つ。昭和60年、つくば科学万博の年。私は県庁で家畜衛生係を担当していた。日本脳炎は豚の体でウイルスが増殖し、それをコガタアカイエカが吸血し、その後人間の血を吸うと、人間に日本脳炎ウイルスが感染する「人畜共通伝染病」である。人に感染すれば、重大な結果となる。茨城県は当時日本一の豚の産地で、日本脳炎ウイルスは夏になると県内ウヨウヨ。（口の悪い人は「霞が浦」を「蚊棲みが浦」という。）さて、万博に客は呼びたし、伝染病は困る。日本脳炎のない外国人や北海道の客に、日本脳炎

を感染させては、本末転倒だ。（関東以西の人は自然感染で大方免疫ができています。東北地方はその中間。）そこで、県議会にかけ、臨時の予算をとり、蚊の殺虫剤をヘリコプターで一斉散布するか、或いは豚に、日本脳炎予防注射を全頭実施し、免疫上の防衛線を張るか……。しかし、そんなこと表だってやれば、何事ぞ？ と怪しまれる。マスコミに嗅ぎつけられたら一大事。そんなことやれば、「わけ有り、危険地帯？」とみなされ、客は来ない。そこで我々がとったのは、人畜共通伝染病ではない豚独自の、ありふれた病気の予防として、つくば市周辺の豚に、日本脳炎予防注射を、隠密裡に実施した。結果は上々で、何のトラブルも起きなかった。隠密予算の有効活用例であった。」

以上のような話から、私は、人類は万物の霊長などと自惚れるのは笑止千万。ウイルスや細菌の巧妙に生きる智慧とか狡猾さとかいうか『恐ろしい微生物や吹けば飛ぶような「蚊」にさえも、お手上げの状態。長年病原微生物や衛生害虫と闘ってきた体験から、その恐ろしさが身にしみて分かる。この度の、宮崎県での口蹄疫は、終息宣言まで130日を要した。処分頭数は牛豚計288,649頭。被害総額約2,350億円は、平成21年度石岡市の一般会計支出決算額、約291億円と比べたら、ほぼ8倍で、その巨大さに驚かされる。科学が進んだ今日でも、人類は、あの微生物達により、首根っこをガツチリ掴まれている。

人類が滅亡するとすれば、私の考えるその第一原因は、人口過剰である。人類も、自然界の中では、単なる一種の生物に過ぎない。過剰に増えれば、生態系が崩れるのは、自然界の掟。森林伐採

↓農地・牧場化↓表土流出↓砂漠化。これが種の多様性を減じ、滅亡に繋がるお決まりのコースだ。長期存命した生物種は、そのポピュレーション維持は、「辛うじて…」の程度が適切。(私に言わせれば日本の適正人口は、縄文時代と同じ十万人程度。現状の千分の一。世界人口も同じこと。)身の程を知らぬ奢りからくる、エネルギー浪費による環境汚染。資源枯渇。その獲得競争が、戦争へと発展。これまでその愚かな歴史を人類は、何度も繰り返してきた。性懲りもなく、過剰人口が浪費を続けるならば、滅亡は間近かだ。

そしてその**第二は、微生物の逆襲**。即ち、目先の対策として用いた消毒薬・抗菌剤・殺虫剤・抗生物質などに対して、「多剤耐性」となって、どんな薬も効かなくなると、逆襲してくる。人類は、高がバイキンとバカにするが、人類は病原菌より、頭が良いとは到底思えない。狂犬病、マラリアなどの、古典的な「つわもの」から、近年のラッサ熱、マールブルグ病、極めつけのエボラ出血熱(人の死亡率88%)など、のぼせ上っている人類を見て、陰でせせら笑っているような気がする。それが長年、病原微生物と闘ってきた私の実感だ。ヒトは、抗菌加工とか、そういうものに囲まれ、温室育ちでは抵抗力を減じ、先細りの運命が予想される。

その**第三は自然災害**。火山噴火やスーパーブルーム(マグマの多地域同時噴出)や小惑星衝突により、噴煙・塵芥が天空を覆い、太陽光が、何年も地上に十分届かず、光合成ができないため、植物が枯れる。更に噴出した硫酸酸化物などが雨とともに降り注ぎ、海水の酸性化を招き、サンゴが白化。そのため、海の生態系が崩れる。地上の植

物とともに、地球表面の7割を占める海の植物が酸素を生産しなくなれば、大気や海中で、「酸欠」状態となり、殆どの生物は絶滅する。(過去5億年間に5回もこのような事件が発生している。今、愚かな人類は、自らの手で第6回目を招こうとしている。)

【資源枯渇】に関し、最近重大な局面が展開している。新聞報道によれば、ハイテク製品に不可欠のレアアース(希土類)の輸出を、世界の埋蔵量の90%を占める中国が、日本向け4割削減すると言いだした。資源の囲い込み作戦だ。レアアースは、電子回路などを作るのに欠かせないレアメタル(希少金属)の内、ランタンやセリウム等17種類の元素の総称。これらを鉄などに混ぜ、永久磁石や2次電池の材料に使い、HV車やパソコンなどの生産に不可欠。

また北極海の海底資源は、中国は沿岸国ではないのに、調査を進め、その権利を強行主張している。日本は首根っこを、完全に中国に掴まれている。

更に現在、肥料の3要素チツソ・リン酸・カリのうち、磷鉱石は、地球上から枯渇寸前である。しかも、その埋蔵量は中国が殆ど。磷は人体を構成する重大元素である。人間一人当たり650gのリンが、骨やDNAに存在するが、それを維持するために、毎日1gのリン摂取が必要。そのためには人間一人、1日当たり22kgのリン鉱石が必要。その磷鉱石の輸出を制限する…。などと中国が言い出したら、これは恐らく第3次世界大戦が勃発する。さもなくば、家畜や人間の糞尿を、再利用するしかないからだ。

更に中東の巨大なオイルマネーは、太陽光発電

や原発に姿を変えたが、日本は受注競争で韓国に敗れ、かつて円借款供与などした国々に後塵を浴びる。】

人類が叡智を絞っても対抗できない天然現象なら、どうにもならないが、人口過剰からくる、資源枯渇や、目先の利益追求のため取った措置が、耐性菌を出現させるなど、もし人類に智慧というものがあるのならば、未然に防ぎうる対応策はあるはず。奢りを捨て、スローライフを貫くことだ。資源を無駄遣いしないために、文明のスピードを緩めることだ。愚かな経済発展至上主義と決別することだ。(こんな言葉の連発は隔世の感。鳩山前総理の「宇宙語」の類かな? 私も、誰にも相手にされなくなる?…)

文明の急加速が、人類を滅亡へといざなう。ホモサピエンスの祖先の原人が、初めて作った「石斧」が、なんと100万年間も姿形を変えることがなかったと、考古学者は言う。それほどスローテンポではないとしても、時速230kmの新幹線が、わずか10年ぐらいで旧式となり、新型が要求される。車も飛行機も同じこと。乗り物だけではなく、その他あらゆるハイテクマシンが、先陣を競う。パソコンなど、3年も経つと、化石扱いされる。誰かが何かの先端技術を開発すると、すぐそれは真似をされる。常にその先を開発しなければ、生きていけない。イタチごっこに終止符は打たれない。それが私に言わせると、乱開発であり、資源浪費であり、地球環境を荒廃させる元凶となる。物を作れば、完成するまでに多くの試作品など廃棄物が増える。その上、流通など数えきれないほどの環境汚染要素が重なる。もう少し古い道具に愛着を持ち、長年使用が出来ないものか? 全人

類が道具などの使用期間を全て、もう一年延ばしたら、CO₂排出量の増加は、急激に減るだろう。無駄なエネルギーや資源の浪費は、環境保全のためにも、ぐっと抑えるべきだ。何度も繰り返し言うが、今ある地球上の資源は、今生きている我々のためだけに存在するものではない。未来の子孫達にも、それを享受する当然の権利があるはず。深山幽谷に潜り込み、「霞」を食べて…とは言えないから、少しの田畑を耕し、山や川から山菜や溪流魚でも分けてもらい、花鳥風月を愛し、どっぷりと、自然に溶け込む。縄文人が山野で我が世を謳歌したように。あゝ、私も縄文時代に生まれたかった。

まるつきり世捨て人の生活ともいかなだろうから、ゆつくりのんびり。文明の利器は、ほどほどでよい。好きな仲間が集まり、歌い踊り、ふるさとを讃える。そしてわが郷土を盛り上げるために、芸術や文学の創造に情熱を傾ける。一流でなくともよい。ささやかなものでよい。それぞれが、自分の中に眠れる「鉦脈」を掘り起こせば、それでよい。

・ 厚顔に 刺すか刺さぬか 蚊が迷う

頑固でいい

伊東弓子

この夏は「暑い」という言葉を何百回使ったことだろう。

ある病院での出来事以来、老いた男の人達のことかとても心に懸った。

リハビリ入院した先で驚いたことがあった。案内された部屋に入って説明を聞いていた時だった。私の後で若い二人の女介護士が、

「この人頑固でどうしようもないのよ」

と指さしている。そのベッドには、頭から布団を被ってじっとしているお爺さんがいた。その時、手助けしていく人が目の前でこういう言葉を使っているのかと思ひ、とても不安になった。説明が終わると皆が部屋を出ていくと丸まっていた背を伸ばし、首や手を布団から出した。奥さんが、

「父ちゃん早く治るように先生や看護婦さんの言うこと聞いて頑張ってな」

「煩い」

「水飲まねえとこの暑さでは大変だからな」

「もういいから…」

何故水飲むことを嫌がるのか後で解ったが、ベッドを汚した事があって気にしているらしかった。

「次から次どうっせいな」

と苛立っている。奥さんの言うことには逆らってしまっている。そこへ中年の介護士さんが来た。静かに話しかけ始めた。

「松さん、手は痛いけど足は大丈夫だから立ってみてね」

するとゆつくりベッドの傍に立った。片手で涙を拭きながらだった。

「ああ、出来たね。松さん辛いことあったんだもんね。急がず治そうね」

「うん」

素直に返事して立ったり、座ったり繰り返していた。どこが頑固なのかと思つた。「頑固」って一口に言うけれど、「頑固」って言われたり、どうして「頑固」になるんだろうと考えた。

働いてきた男の人達が体が利かなくなつて横たわっている姿を見て、本人自身の悔しさや悲しさはどんなだろうかと思わずにはいられなかった。

一言で「この人は頑固なのよ」と片付けられないものがある事を解つてあげて欲しいと思つた。私も元氣だった頃の夫には我が儘放題してきたが、体が弱くなつた今どう向き合つてあげたらいいか戸惑っている毎日。だから弱い者の力にもなりたしいし、「頑固」という中身も知りたい気持ちだった。そんな訳もあつて、暑さの中を病院に通いながら男の人達の働く姿や表情がとても強烈に目に焼き付いた。

暫く雨も降らない、乾ききつた大地で草刈りをする男達、草と共に土埃を巻き上げ、強い陽ざしを浴びながらやっていた。食後は木の下で横になつていた。弁当とお茶を持たせてくれる家庭があり、夕方にはそこに帰つて安らげるのだろう。

足場を組む若い男達、腰に下げた手拭いはいつ汗を拭くのだろう。汗は滝のように出ている。その汗は子供や妻の待つ家で、ゆつくり流すことが出来るのだろう。

灼熱の太陽を頭に、背に、顔に浴びながら道路工事や電気工事をしている老年の男達、役割分担をして作業を進めている。一方通行で待つていた車は、待たされたとばかりにエンジンを吹かして去っていく。それに頭を下げ見送っている。この人達も家族と共に一日の話しが出来る団欒を持っている事だろう。

道沿いの枯草を集めている中年の男達の頭から首まで陽ざし除けのタオルで覆っているが、焼けた両腕から汗が噴き出ている。「水飲んで」と声をかけたようだ。夜、奥さんはお摘みを用意し

てくれるのかな。「さあ冷たいのキュート」と進めてくれるのかな。

大荷物を肩から下げた若い男一軒づつ声をかけて歩いているが、人は出てこない。荷物は勿論体も足も心も重い事だろう。こういう姿を若い妻は知っているのだろうか。涼しいレストランで友人と、面白可笑しく軽食などつまんでいるんじゃないだろうな。

私は夫の仕事が分かっていた積りだが、苦労を知らずとしていただろうか、等思ったりする。

部屋の人達が皆元気かと思うと訪れる楽しさが出てきた。一人一人の姿を通してどんな仕事をしてたのか、どんな家庭に包まれているのかと想像し、合う度に一人一人の人生が見えてくる。言葉が出にくくなっているから、会話が少ないが励まし合いは強い。

それを引っぱってくれる竹さんは、元気な人だ。女の孫さんが来る。「年寄りには二階はだめだよ」と注意してくれる話も聞いた。

静かな杉さんは息子さんに来て、身の周りを片付けて洗濯物を持っていく。ここでは一番長くいるという人で、頑張り和我慢だよと励ましてくれる。

体の大きな楠さんは奥さんが来て賑やかな空気になる。傍に座って皮膚に薬を塗ったり、食べ物を進める。「早く帰って」と何回も言う。

夫は一瞬喜ぶが何かにつけて涙を流す。喜びか悲しさかは分からないが、努力をしている様子が分かるので意にそうように対応している。皆さん家族に支えられている事もよく分かる。そんな中で気持ちを分ける方法や接し方を勉強させてもらっている。世間話しも沢山聞かせてくれる。男の

人の方が世間を広く見ていることが分かったり、反省の意味も加わった話しをしているのに気がついた。

何か後ろ髪ひかれる思いで病院を出る事が多い。駐車場で二人の男に合った。自転車で斜めに渡って通り過ぎていった。気の合う二人で何処へ行ってきたのだろうか。直感で一癖ありそうな二人何か悪さでもしてきたのじゃないかと感じた。少し位悪さしてもいい。自転車に乗れる元気があった方がいい、と勝手な事を思ったりした。「悪さしても」といえばある男のことを思い出した。仕事の腕はよかったと聞く。家の中の事は知らないが、世渡り上手だったという。儲け話しを拾って歩き損をしない方法で稼ぎ、人の悪口をいい放題言っている。長年連れ添った奥さんを春先寒い雨の日亡くしたという。淋しいお葬式だったと聞く。何故か私も恨まれていたので近寄ることも恐ろしく出来なかった。春の暖かい日に街道から庭に入る姿を見た。その後姿は淋しそうだった。以前の威勢のいい姿とは違って変わり、淋しい後姿だった。片手にのひろ五〜六本もって歩いていった。一人で昼食をとるのだろうか。二人とは違う一人の淋しさに耐えていかねばならないのだと見送った。戦争で仲間が死んだ。その人達の分迄全うして生きていくんだという人の生き方を聞くのがとても楽しい。

先輩から電話を貰った。毎日大変だね。人間苦労はつきもんだ。くよくよおしてばあさん、ばあさんになんなよ。年はとつても爽やかな婆さんでいてなと励ましの言葉を素直に喜んだ。

年寄り一人一人に長い長い人生があった。そこにはその人なりの生き方があった。その生き方の

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

- 10月11日(月) PM3:00~吉川二郎ギターリサイタル
- 10月17日(日) PM3:00~4本の花 若手女性4人によるギターコンサート
- 11月7日(日) PM3:00~ハープの調べ
- 11月21日(日) PM3:00~福田進一ギターリサイタル
- 12月5日(日) PM3:00~アンドレイ・パルフィノビッチ ギターリサイタル
- 12月12日(日) PM3:00~角 圭司 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

中から生まれ育ったのが「頑固さ」だと思っただから「頑固さ」はみんな違う中味を持っている。老人にくっついていて「頑固さ」が私は好きだ。私の「頑固さ」もだいじにしよう。

古代エジプト文明の風にふかれて(7)

兼平ちえこ

三月八日〜十五日の八日間、エジプト周遊の旅に出かけた時のことを紹介して参りましたが、七回目の今回で最終回。

アプシンベル神殿のスケールの大きさに驚嘆の余韻にひたりながら再びアスワンに向かって二八〇キロ。

バスに揺られ、眠りにゆられ到着したところは、一九七〇年完成のアスワン・ハイ・ダムと巨大な人造湖のナセル湖。

アスワン・ハイ・ダムとナセル湖

アフリカ大陸を流れるナイル川は全長約六七〇〇キロ、世界最長の国際河川でエチオピアのタナ湖から流れてくる「青ナイル」と、ウガンダのビクトリア湖あたりから流れ出る「白ナイル」がスーダンのハルツームで合流、そしてエジプトに流れ込む。川はエジプトを貫流し地中海に注ぐ。

紀元前五世紀のギリシャの歴史家、ヘロドトスが引用した「エジプトはナイルの賜物」という言葉は、四大文明のひとつを育んだナイル川が流域に住む人たちに与え続けた恵みの大きさを言い表したもので、ナイル川はまさにエジプトの生命線であると言う。

一九五四年用水確保と水力発電の為に計画されたダム建設は、一九七〇年、アスワン・ハイ・ダムとして完成し、そこに誕生したナセル湖は全長五〇〇キロ、表面積は琵琶湖の約七・五倍。

しかし、このダム建設はエジプトの近代化に貢献する一方、ナセルの洪水が無くなり下流の土地

がやせることや、ナセル湖からの蒸発した水が周辺の遺跡を傷めるなどの問題も生じているという。それでは、ここで小さなカメラで記念撮影。

「大きな望遠レンズをつけたカメラは注意されませう」とのガイドからの注意。

ダムが破壊されると、大変な水害が起きることもあり、軍事機密であるダムの撮影には制限があるとの事だった。

ダムとナセル湖をあとにして、ガイドからのプレゼントでエジプトの大地の砂を、飲み干したペットボトルに頂いて、切りかけのオベリスクへ向かう。

切りかけのオベリスク

オベリスクとはピラミットに付属する太陽神のご神体だったが次第にピラミットにとって代わるようになり、切りかけのオベリスクとは未完成のオベリスクであって、長さ四十一・七五m、推定重量一、一六八tと巨大なものであった。

三面は切り取られているが、途中でひびが入った為、放棄されたとされている。

当時は長方形の穴を岩にあげ、木又は青銅製のくさびを打ち込んで岩を割った。その跡が残されていた。

アスワンでの見学も終了し、午後七時発の夜行列車「ナイル・エクスプレス」にて一路カイロに向かう。

車窓からの景色が見られず残念であるが、舟旅と錯覚しそうな大揺れの寝台でも睡魔は間もなくやってきた。

十二時間が過ぎ、カイロ駅から一つ手前のギザ駅で下車、ここからバスで二二〇キロ、アレキサ

ンドリアに向かう。

アレキサンドリアはマケドニア王国のアレキサンダー大王によって紀元前三三二年に建設された。

大王の死後、その部下だったギリシャ人のプトレマイオス一世が即位し、ここを首都と定め、以後、プトレマイオス王朝の都として繁栄し、十五代続いた王朝はローマの侵略などにより衰退し紀元前三十年、絶世の美女として知られるクレオパトラ七世の死をもってエジプト最後の王朝は幕を閉じた。

カタコンベ

カタコンベとは二世紀頃から使われていたとされる地下の共同墓地であった。

複雑に入り組んだ三層構造で、らせん階段を下りて行くと、ひんやりとした空気に包まれ薄暗く迷路のようであった。棺や墓碑に刻まれた壁画や彫刻はファラオ時代のエジプトとグレコ・ローマン時代の文化が入り混じって当時の変遷を知る事が出来る貴重な資料となっていた。

ポンペイの柱

カタコンベに近いポンペイの柱は小高い丘に立つコロント式の円柱である。

ローマ皇帝ディオクレティアヌスへの感謝の気持ちを込めて二九八年、アレキサンドリアの住人たちが建てたもので、高さ三十m、外周九mにも及ぶ巨大な赤花崗岩で出来ている。

残念ながらポンペイの柱は車窓からの見学となつた。

ガイドの説明ではこの円柱の岩はアスワンから運ばれたもので、こうした巨大な岩石は大いなる

ナイル川の洪水時を利用して運搬されたと言う。洪水は災害とつながる日本では想像もつかない情景である。

アレキサンドリア博物館

クレオパトラ七世亡きあと、三年後に大地震によって地中海の底に沈んでしまった遺跡の発掘された遺物が中心に展示されてあった。夕食は旅の締めくくりにふさわしいナイル川、ベリータンステイナークルーズへ。

帰国の朝は爽やかな目覚めであった。

悠久のナイルと神秘の古代遺跡、エジプトの首都「カイロ」は町のいたるところにモスクが立ち並び独特な雰囲気醸し出してイスラーム建築や博物館が集まっていた。

ムハンマド・アリ・モスク

一八二四年、ムハンマド・アリによって建設がスタートしたオスマン様式の巨大なモスクは繊細な細工の施された天井が誇らしげだった。

その日のモスクは大層賑わっていた。モスクで出会った女の子は明るく、人懐っこく、気軽に写真の中に入ってくれ、小学生の団体では、彩られたターバンや衣服に身を包み満面の笑みで手を振ってくれた。大人の白、黒の装いとの違いにほっとしながら、大声で笑顔を返した。

悠々と流れるナイル、エネルギー溢る古代の人々に、とてつもない大きな風を頂いた。
ご愛読有難うございました。

・青の空に鶏頭真紅の声田ぶ ちんぽ

大石内蔵助良雄

小林幸枝

笠間市の佐白山麓公園に忠臣蔵で有名な赤穂の大石内蔵助良雄の像があると聞いて、赤穂浪士なのに何故だと思ひ、早速見に行ってみました。

佐白山麓公園は鎌倉時代に笠間時朝が築城した笠間城の下屋敷跡にあります。

忠臣蔵に知られる浅野家は、赤穂の殿様になる前は笠間の殿様でした。笠間城は佐白山頂に天守閣を持つ城で、家臣は毎日の往復に苦勞していました。そこで、二代目の当主長直が登城を築にしようとして山麓に下屋敷をつくりそこで政務を執る事にしたのでした。ところが下屋敷の造成が白壁で壮麗であったため幕府より新しく城を造つたと見做され、赤穂に転封となったのでした。

大石内蔵助の祖父も笠間藩の家老で、大石家の屋敷跡は今も残され保存されています。浅野家転封330年に当たる昭和47年に、赤穂浪士の儀挙を称えて、大石内蔵助良雄像が佐白山麓公園に建てられたのでした。

普段の登城には大変だった笠間城は、佐白山の地形を巧みに利用した堅固な山城で、現在も石垣や空堀等の史跡が残されています。城内には二層の物見櫓があつて登つて来る者にらみを着せていました。この物見櫓は八幡台櫓と呼ばれ、市内の真浄寺に移築されて県文化財として保存されています。

笠間にはその他「上を向いて歩こう」の国民的歌手の坂本九さん、「別れの一本杉」の作詞家高野公男さんの石碑や、勝新太郎の映画で知られている座頭市の出身地だった事を伝える石碑もあります。

自分達の身近な周りを一寸気をつけて見ると色々なものがある事が分かり、楽しくなってきました。四季折々に彩られる中で、改めて自分達の足を歩いて再発見してみるのも大事ではないでしょうか。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で・・・
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、
自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
TEL0299-55-4411



《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299-43-6888

Ⅱ 難台山の難題Ⅱ

日本の歴史を学ぶ外国人が最も難しいと感じるのは「南北朝時代」だと聞いたことがある。外国人でなくても天皇家の財産をめぐる相續争いで国中が混乱し、その一方に尽くした人物が忠臣であるのに現在の天皇は対立した系統だと聞けば支離滅裂に呆れ返って「国民不在」を嘆くしかない。

今は民主主義社会と言われるけれども、政治体質や社会構造などは、その幼稚さを含めて混乱の南北朝時代や室町時代と変わらない。「政治」の政は「まつりごと」神に誓い人民の生活を支えること」であり、治は「政を通じて民を統御すること」が本来の意味らしいから、昔も今も殆どの政治家は権力により「治」だけを行って「政」を抜かしていることになりはしないか？

政治家の素材が悪い現代のことは不運と諦めるしかないが、歴史を振り返って見ると「偉人」とか「英雄」とか呼ばれた人物も殆どは権力を行使しただけに過ぎない。この話の時代で鎌倉幕府・北条氏を倒し「建武の中興」を成し遂げた後醍醐天皇も、また、強引に室町幕府をつくった足利尊氏も共に政治への理想ばかりが高くて「政治の本質」を全く知らなかったと断言せざるを得ない。

後醍醐天皇は明治以後の教育で「英明な天子」だと教え込まれていたが、天台宗では密かに「暗愚説」が伝えられていたと、今東光先生が座談会で述べておられた。「暗愚」と言うより「偏執的性格」であったらしい。天台宗が怒っているのは座主の尊雲法親王こと大塔宮護良親王が天皇の理想追求に利用された後で見放されたからである。

そういう複雑で面倒な時代に、権威が落ちた常陸国府の大掾職を世襲し、それを姓としてきた大掾詮国（あきくに）と、その嫡男・満幹（みつもと）という豪族は運が悪いのか、要領が悪いのか、記録を見る限りではこの父子の時代から大掾氏の没落が始まっているように気になる。

南北朝争乱が収まりかけた時代なので、世の中の流れが掴み難かったのは分かるが、水戸城と府中城と二つの城を本拠とし、肥沃で広大な領地を持つていたのであるから昔の亀のように、じっと甲羅の中に頭と手足を引つ込めて世の中の動きを見極めることが出来なかったのであろうか？名門意識がそれを許さなかったのかも知れない。ダイナマイトを腰にぶら下げて焚き火に近寄ったり、大事な時期に寝た振りをしたような行動がある。

大掾満幹が、鎌倉前執事・上杉禪秀の誘いに乗って反乱軍に加担し、負け組に編入されたのもその一例であるが、それより三十年程前には「興亡の連鎖・その二」で触れたように、大掾氏が保有していた広大な領地の一部を鎌倉管領（かんれい）足利氏満（持氏の祖父）に削られてしまった。

なぜ、そうなったのか？一口に言う「有明の松」伝説に関わる「難台山城の攻防戦」で対応を誤ったからであるが大掾氏にも言い分がある。それを釈明するために、或る豪族を登場させる。

かつて平将門を討つた藤原秀郷の後裔でやがて下野国の大掾職を世襲する小山氏である。五、六代前の小山朝政は源頼朝が伊豆に兵を挙げた際には真っ先に駆け付けて重く用いられた。妻が頼朝の乳母であったらしい。その子孫は皆川氏を称して江戸時代初期に府中藩主となり恋瀬川の堤防工事に国分寺の鐘を使って返さずに放置し、鐘は盗ま

れてしまった。迷惑な大名であるが、その先祖にも実に迷惑な人物が居て、常陸大掾氏が没落したのはどうも、その所為であるらしい。

南北朝争乱の発端は「興亡の連鎖・その三」で述べた後醍醐天皇の幕府転覆計画であるが、それが発覚した正中元年（二三三）から凡そ六十年ほどは日本中が合戦続きであった。その間には主役の後醍醐天皇も足利尊氏も、二枚目俳優の楠木正成も三枚目を演じた新田義貞も此の世に居なくなる。室町幕府は三代目の足利義満が將軍になり、やがて南北二つの朝廷がやっとな本になった。

諺にも「六日の菖蒲、十日の菊」と言う。何事によらず時期外れは困りもので、南北朝の争いもほぼ勝負がついた天授六年（二三八〇）五月に下野国で小山義政が兵を挙げ守護の宇都宮基綱を襲った。守護職は幕府から命じられたものであり、小山氏の言い分は「南朝方として義兵を挙げた」と言うのだが、実は同族である足利氏の天下を妬んだ新田の残党に騙されて鎌倉の管領に個人的抵抗をしたにすぎない。大掾詮国も鎮圧に出陣を命じられたことは「その二」で述べたとおりである。

小山義政は一旦降服したのに、性懲りもなく抵抗したから二年後には攻められ自殺している。「これにて一件落着き…」の筈だが、はた迷惑な男が一人残っていた。義政の遺児の小山若丸である。

名前から判断すると未成年のような気がするが、戦争を仕掛けようとするのであるから七五三の年齢ではあるまい。弘和二年（二三八二）四月に父親が討伐されてから数年間は東北に潜伏して、至徳三年（二三八六）六月には故郷に錦を飾るつもりで隠れていた家来を集め戦闘態勢を整えた。

鎌倉でも放つて置けないから管領の足利氏満が

討伐の軍勢を派遣した。日本外史には「…小山義政、復叛く。義満、自ら將として撃ちて之を殺す。其孤(みなしご)穉狗(若犬)、又兵を陸奥に起(こ)す。復攻めて之を殺す…」とあり、これらの合戦により若犬丸は死んだことになっているのだが実は野良犬のようにしぶとくて、本当に死んだのは十年も経って皆が忘れた頃である。その若犬丸が密かに筑波山麓の小田城に潜り込んでいると鎌倉へ密告した者があった。

反乱首謀者の生き残りではあるが、まとまった兵力を抱えては居らず、大騒ぎをする迄も無いのだが「小田城」と聞けば鎌倉でも思い当る。四十何年か前まで小田城は南朝方の一大拠点であり、足利尊氏の腹心である高師冬(こののもろふゆ)が攻略に苦勞した城である。何より北畠親房が南朝系・後醍醐天皇の為の御用本「神皇正統記」を書き著した故地なので、北朝方の足利氏にとっては異教徒の聖地ほど神経を使う場所になる。

其処に「反乱」を趣味にしているような若造が転げ込んでいたのでは見逃す訳にいかない。幕府は鎌倉の執事である上杉朝宗を総大将として手持ちの軍勢を差し向けると共に、常陸守護職の佐竹氏や近辺の武將たちに出陣を命じた。上杉朝宗の息子が、後に謀反(むほん)を企てて地方の武將たちに影響を及ぼした上杉禪秀である。

難台山事件の首謀者は小田城の主・小田孝朝(たかとむ)のように書いてある史書が多い。常陸国へ逃げて来た若犬丸は、かつては南朝方であった小田城に流れ着き、小田氏を味方に付けてから、どこか楠木正成が籠った千早城のような要害堅固の場所が無いか探して筑波連山の東端にある難台山城に立て籠ったのであろう…と勝手に想像してい

たのだが、これが少し違っていたようである。

一年以上も抵抗して幕府軍を悩ました合戦なのに降伏した小田孝朝は「ゴメンナサイ」と言った程度で許されている。幕府軍の主力である佐竹氏が小田孝朝と近い親戚関係にあったので全面的に庇ってくれたらしいのだが、それにしても処分が甘い。「日本外史」の続きには「…小田五郎といふ者、亦兵を起(こ)す。上杉朝宗を遣し、撃ちて之を夷(たいら)ぐ…」とあり、「八郷町史」も五郎説をとっている。何か訳が有るのではないか…

「常陸国における南北朝争乱の終りを遂げた合戦」と言われる此の出来事については、具体的に記録された史料は少なく「太平記」「後太平記」などでも触れておらず、昭和初期の歴史年表に「上杉朝宗、小田五郎を攻めて之を殺す」とあるのみで事の真相が分からない。そこで、ふと思いついたのが次のことである。

「ふるさと“風”」にご支援・ご指導を頂く太田尚一さんは、畷書房のお仕事をされておいでなのだが、その畷書房から昭和五十年代に復刻版で出された「常総戦蹟」という明治時代の本がある。かなり以前に入手して一通りは読んだつもりなのだが忘れていた。その本に「男體山・小田藤綱勤王の地」として「難台山」のことが記されている。

やはり一般史書に書かれたような小田孝朝だけの反乱では無く難台山籠城事件の首謀者は、執念深い「小山若犬丸」であり、小田孝朝の弟・五郎藤綱がこれに同調したらしい。以下、常総戦蹟の内容に沿って話を展開させて頂く。

小田城が南朝方の拠点であった頃、小田城の主は南朝一辺倒の小田治久であった。治久が南朝方に付いたのは後醍醐天皇の側近・藤原藤房に感化

されたからである。天皇の幕府転覆計画が漏れて笠置山へ逃げ出した際に、只一人だけ傍に居たのが藤房である。二人ともあっさりとは捕まり天皇は隠岐の島へ移され、藤房は常陸藤沢に流された。藤房の監視役を命じられたのが小田治久であり、「ミイラ取りがミイラになる」諺どおり勤皇思想に感化された治久も南朝方に付いて抵抗していたのだが、小田城が高師冬に包圍された興国二年(三四)に説得されて足利方へ降伏した。

その二年前に後醍醐天皇が世を去り、南朝方は頑固な右翼思想の北畠親房が主導権を握っていたから地方の武將たちも心境の変化が起きている。それ以来、小田氏は室町幕府に忠誠を誓っていたので、一般史書が言うように治久の息子の孝朝が若犬だか馬鹿犬だかに扇動され、勝つ見込みの無い難台山に自分から立て籠る訳が無いのである。

元中三年(三八六)六月、小山の近辺で兵を挙げた若犬丸は、攻め寄せた鎌倉軍と一か月ほど戦って負けた。敵の軍勢が圧倒的に多かつたから「若犬丸」は戦死したと言われた。しかし若犬丸は戦場から脱出し名前の「犬」が役立ったのか各地を彷徨い歩いて翌年の春先に常陸国へ入った。南朝の残党を受け入れてくれる豪族は居ない。

その頃、小田城は讃岐守孝朝が城主であったが、弟に五郎藤綱と言う元氣者が居た。どういう手づるか五郎藤綱を頼って若犬丸は小田に来た。多分、「南朝方に尽くした小田城」という古いイメージでいたと思うが時代は急速に変わっている。弟の知人がお尋ね者だと知った孝朝は幕府への手前、若犬丸を暗殺しようとした。小田家存続の為に時代遅れの「勤皇」などとは言っていない。それを知った藤綱は、兄の行為に反発して自分

だけでも若丸に協力しようとした。新興宗教のように洗脳され「南朝」が「難聴」になって意見などに聞く耳を持たなくなっていたし、兄への対抗意識もあつたのであろう。藤綱には妻子も居たから、何時までも居候（いそうろう）の身ではいられないという焦りがあつたかも知れない。藤綱と若丸は城内で密かに反乱の呼びかけに応じる隊員募集を始めた。ところが、かつて南朝方として戦つた小田城のこと、隊員が三百ほど集まつたのである。これが二十や三十ならば諦めるのだが、三百も揃うと後へは引け無くなる。

まさか小田城を奪う訳にもゆかず、また小田城に近い多気山には源頼朝時代に小田氏の先祖が没落させた本流大掾氏の館跡があるのだが、目と鼻の先であるから仲良くするには良いが喧嘩するには向かない。手頃な山を探して攻めるに陰しく、水が得られ食糧などの輸送経路もあるという条件で岩間にある標高五五三mの難台山が選ばれた。取り敢えずアパートは探したが家財道具も日用品も無い状態なので、小田城の倉庫から武器や食糧などを少し盗んで堂々と家出を決行した。元中四年（一三八七）四月のことである。

難台山は小田一族末流の宍戸氏が領有する山である。南北朝の合戦がやたらと行われていた時代には砦として使っていたのだが、すっかり荒れ果てている。宍戸氏も幕府への手前、反乱の拠点に使われるのでは公然と貸せないが、空き家を親戚の若者が勝手に使う分には言い訳が出来る。藤綱が登ってみると、東と南の展望が開けて北には愛宕山があり西側には麓の集落が良く見下ろせる。筑波連山の東端であるから見晴らしの良い場所を警戒すれば足りるので護るに固い。問題は食糧の

確保であるが攻めて来るであろう敵には分からない山道を利用すれば補給が出来る。その為には地元豪族の協力が不可欠になる。

小田五郎藤綱が宍戸氏のほかに頼つたのは真壁城の真壁頭幹（あきもと）である。反乱を吹き込んだ小山若丸は、偉そうに「南朝再興」の屁理屈を主張しているだけで米一粒の算段も出来ないから全てのことを藤綱にかかってくる。まずは部下に山腹の防衛工事を命じてから一旦、山を下り、密かに真壁城を訪れた。頼られた真壁氏は大掾氏の一族で、源頼朝に没落させられた大掾義幹の末弟・長幹を祖先としている。南北朝時代には小田氏と共に南朝方として活躍していたから、藤綱は「南朝方」の旧縁で当てにして頼みに来た。

「若丸難台山挙兵」の知らせを受けた鎌倉では追討の軍勢を差し向ける手筈を整えると共に関東の武将たちに出陣を命じた。佐竹氏、小野崎氏、大掾氏、真壁氏、江戸氏などに兵力の割り当てが来たであろう。これは私の勝手な推測なのだが、五郎藤綱が小田城から難台城へ移つても、小田城は同類とみられて反乱の名義人は小田城主・孝朝とされたのであろう。孝朝は弟の行動に困りながら、ともすれば世間から「小田は南朝方」と見られる宿命を感じていた。攻め寄せてくる幕府軍の数は日々に多くなり、立て籠る数百の城兵に対して数万の軍勢が難台山を包囲することになった。これではとても最終的に勝ち目がない。犬若丸などはどうでもよいのだが何とか弟を助けなければならぬと孝朝は思っていた。

もう一つ孝朝を悩ませた問題は既に述べたように、小田孝朝は攻めて来る主力の佐竹氏とも近い親戚だったのである。当時の佐竹当主は第十一代

の義信であるが母親は孝朝の父の従兄妹であり、さらに孝朝の妻が佐竹義信の妹である。孝朝は弟が真壁頭幹を頼ることを見越して、共に藤綱の説得を試みたのであろうが犬神に洗脳されているので意志を変えない。仕方なく真壁氏に難台山城への食糧補給を頼んだのではないだろうか：真壁頭幹も内心では鎌倉に不満を持っているから、是に応じて裏間道から食糧を供給し続けた。

やがて近辺の武将たちが押し寄せ、鎌倉からも幕府軍が到着したけれども崖上の難台山城へ一気に押し寄せる訳にはいかない。回りを取り巻くだけで合戦の効果があがらない。城の上から見ると敵の旗が難台山の周りを埋め尽くしている。そして取り巻きの軍勢が油断をした時には、何処から出て来るのか城兵が奇襲攻撃をかけてくるので被害が出る。落城前の戦いでは南北朝時代に那珂川上流地帯に進出していた江戸氏の軍勢が狙われて当主の江戸通高が戦死してしまった。

攻撃軍は城内の食糧が短期間で尽きることを予想していたのだが、一年近く経つても籠城軍が腹を空かしている様子はない。これは何処からか食糧が密かに運び込まれている：そこで攻め手の兵士により山麓一帯が徹底的に搜索され、遂に食糧補給の道が見つかった。真壁頭幹の手により食糧、武器などが難台山城に補給されていたのである。この援護には小田孝朝も積極的な支援を行っていたのであろう。そこで包囲軍は山腹から麓一帯にかけて完全に封鎖してしまった。

城内では木の皮、草の根などで飢えを凌いだがかこれも限りがある。孝朝は弟に降伏を勧めたかも知れないが、小山若丸の感化で勤皇の理想に燃える日本男児には説教も効果が無い。「勤皇」とは

言うが、その根底にあるのは庶民には全く関係の無い天皇家同士の権力争いなのであるが、昔の立派な人にはそれが通じない。籠城から一年ほど経った元中五年五月のある夜に小田五郎藤綱は部下を集め最後の別れを告げた。

城に居た婦女子と藤綱の子らは、何人かの家臣が付き添って密かに背後の山に登り、そこから西に下って陽が昇る前に有明の松まで辿り着いた。

「有明の松」の伝説では、肝心な落ちのびて来た一行の安否について触れていないが、小田五郎藤綱の子孫と言われる方が涸沼川南岸地域に豪族として定着していると「常総戦蹟」は伝えている。

難台山から離れるように西側の吾国山（あがくにさへ）を越え六戸領内に庇護されたのであろう。

難台山城に何らかの変化を察知した攻撃軍は一斉に攻め込んできた。空腹の兵士は意気盛んではあったが身体が動かない。次々と倒され藤綱も城に火を放ち切腹して果てた。享年二十五歳。逃げ上手な小山若丸は、此処でも素早く脱出した。

小田城主の孝朝が、攻め寄せた幕府軍に対して具体的にどのような対応をしたのか記録はない。にも関わらず、歴史上では戦犯の第一号にされてしまった。弟の責任を問われたのであろう。不思議なことに、食糧援助などをしていた真壁頭幹には特別な処罰が行われなかったようであるが、真壁氏は上杉禅秀の乱で没落してしまっただけだ。

ここで郷土の豪族・大塚氏が「難台山の攻防戦」でどのような働きをしたのか…という主題に触れなければならぬが、残念ながらこれにも記録がない。出陣をしたことは間違いないのだが…土地の事情に詳しいから、なるべく敵に遭わない難台山の裏手の守備に回っていたのではなからうか…

城に食糧などを送り続けた真壁頭幹は大塚氏の一族なので頼まれて輸送隊を見逃したりしたかも知れず、難台山を囲んだ多数の軍勢ではさぼっても分らないと思つて合戦を避けたかも知れず…

ところが戦場には監視役が付いており「軍監」と呼ばれる幕府の「侍所所司（さぶらいところしよし）」が鎌倉から来て各武将の勤務評定をしていたのである。戦争責任のほうは難台山城が陥落して小田五郎藤綱は戦死しているし、若丸は逃げてしま

い事件の犯人は居ない。幕府も調書をつくるのに都合が悪いから小田孝朝を主犯としてマスコミに発表したが、本人が抵抗した様子もなし佐竹氏の頼みもあつて特別な罰は与えなかった。

武将たちはそれぞれの領地へ帰り、軍監は合戦の状況を鎌倉管領・足利氏満に報告した。この事件の戦死者も双方に少なくなつたが、大将クラス的人物で戦死したのは常陸国の江戸道高しか居なかつたから、褒美として息子の道景に領地が与えられた。その場所が「興亡の連鎖」の二で触れた河和田、赤尾関、鯉淵の三カ所である。

江戸氏の活躍と比較されたのかどうか、地元で交通費はかからなくても一応は出陣した大塚詮国に対しては、鎌倉執事の上杉朝宗から「難台山での勤務態度が宜しく無かつた」という理由で河和田ほか二カ所の領地没収通知が届けられたのである。大きな違いである。直接的に関与した同族の真壁頭幹は大塚氏に含まれて助かつたのであろう。

没収された領地は石高三千石ほどではあるが、水戸と府中（石岡）を結ぶ街道の水戸寄りにあり、二つの城を持つ大塚氏は新興勢力の江戸氏に楔を打ち込まれた形になつた。はからずも難台山に出陣した大塚氏は、これにより「家運衰退」という

難題を抱えてしまつたのである。

興亡の連鎖（その五） 間連資料

（あとがき）

この話に関わりのある年代は天授六年（二三八〇）から元中五年（二三八八）迄であり、主な出来事は既に「興亡の連鎖 その一」で付した年表に含まれるので省略する。当時の將軍は室町幕府第三代の足利義満であり、十歳で家督を継いでから二十年ほど過ぎて居る。南と北に、それぞれの天皇が居て、武将たちが両派支持に分かれて争うという嫌らしい時代も終りに近い。

義満が將軍で居た二十九年間に諸国で合戦が無かつた訳ではないが、どちらかと言うと武将たちの勢力争いや仲間割れのようなものが多く、本心はどうでも、明らかに「南朝復興」の大義名分を掲げて幕府への抵抗を示したのは「難台山」における小田五郎藤綱の挙兵」ぐらいである。難台山の合戦が行われてから数年で南北朝がようやく一本化されているから、この合戦が「常陸国における南北朝史の終末を飾る」と位置づけられている。

「興亡の連鎖」本文でも述べているように難台山の事件は地元・府中城に居た大塚氏の興亡にも深く関わっているのだが、残念なことにその内容は余り知られていない。石岡市史でも下巻に「…当国内にあつては、佐竹氏の勢力拡大、小田・大塚氏の衰退が進行しはじめることとなつた」とあるが、衰退の理由は書かれていない。

さすがに「八郷町史」では難台山が地元だけに「小田孝朝の乱」の四ページに亘る記録があるが、合戦に参加した武蔵国の武将の手柄を誇示する軍忠状が主であるから全般の様子は見えてこない。

しかし、古い「八郷町誌」には「有明の松」にまつわる伝説が記載されているから、合戦後の敗者の哀れな雰囲気は伝わってくる。

そして幸いなことに崙書房から出された「常総戦蹟」が存在していたのである。こういう具体的な様子が書かれた史料は大切にしないと郷土の歴史は失われるか、忘れ去られてしまうかである。

今回の話を敷衍（ふえん）すると、難台山城の戦いに出陣した大掾氏は合戦という命がけの行動に参加して勝ち組に居たにも関わらず、大切な領地を三か所も失ってしまった。この領地を合戦の褒美として貰ったのは新興勢力の江戸氏である。

「常総戦蹟」によれば、新たな領地を得た江戸氏が其の地を拠点として大掾氏のライバルとなつてゆく：次第に没落してゆく大掾氏と興隆してゆく江戸氏、その原因は何か？「盛者必衰」：大掾氏が同族の平家のように「驕れる者」であった訳ではないとしても「大掾」という地方公務員の官職を苗字としていたこと自体が「井の中の蛙」であつたように思われてならない。

大掾の職に在った者は全国で十三家、権大掾（このだいじょう）を含めれば二十六家、その大部分は常陸国と同様に世襲であつたらう。地方では権力を握つていても、その地位を中央の武人に比較すれば下級将校の少尉並みに過ぎなかった。

もう一つ、府中城に居た大掾氏に戦場での行動やら生存方針に狂いを生ぜしめた要素に「室町將軍との関係」がある。「本文・その二」でも述べたように、鎌倉管領（かんれい）の管轄下に置かれた大掾氏は、都の將軍から特別な扱いを受けていたのだが、そのことは地位や身分を保証されるものでは無く役に立たない名誉のようなものであり

將軍と鎌倉管領とが不仲になればそれがマイナスに作用する：大掾氏は全てがツイテいなかった。

江戸氏のこと

難台山城の合戦に出陣し手柄を立てたかどうかは別にして、乱戦で小田五郎藤綱に斬られてしまった江戸通高の行動に対し、鎌倉管領は大掾満幹が保有していた領地から河和田、赤尾関、鯉淵の三か所を褒美として与えた。

当然だが貰った方は嬉しいし、削られた方は悔しい思いをする。特に河和田には大掾氏の支城が在ったから城一つを失ったことになり痛手は大きかった。足利尊氏が没する少し前の延文元年（三五〇）に河和田入道という大掾氏の重臣が築いたと言われる城で、千波湖西方の台地に置かれた平城だが、何重もの土塁や空堀で囲まれており、街道の要衝に位置していた。江戸氏のほうは此処を拠点として勢力を拡大してゆくのであるから、同じように難台山に出陣しながら大掾氏は踏んだり蹴つたりの目に遇つたことになる。

素人考えはあさはかなもので、私は「江戸氏」の名前を聞いたときに「これは太田道灌が築城して、後に徳川家康が拠つた江戸城に所縁がある氏族なのか？」と単純に思つたのだが、武将としての江戸氏には次の二つの流派があるという。

その一つは桓武平氏の良文流―長元元年（一〇二八）に清和源氏が東国に勢力を広げるきっかけとなつた「平忠常の乱」の主人公・平忠常の兄・將常から出た畠山氏と同系の秩父氏系―武蔵国江戸に住んで「江戸氏」を称した。（江戸城の江戸）

もう一つは藤原秀郷の子孫であり、江戸通高はこちらの系統とされる。藤原秀郷と言う人物は平貞盛と共に平将門を討つたことで知られており、

藤原北家の魚名流だとされているが怪しい部分が無い訳ではない。延喜十六年（九一六）に罪を犯して下野国へ流され、そこに土着した。罪を許されたのは二十何年か後に平将門を討つたからである。その子孫が近辺に広がり、難台山で騒ぎを起こした小山犬若丸も末裔である。

江戸氏の祖先も平安時代末期に下野国から鮭とは反対に那珂川を下つてきて藤原通直という者が御前山付近の河辺郷に住み「河辺氏」を称した。保元の乱が始まる七年ほど前の天養五年（一二四九）には河辺通泰が那珂五郎（那珂氏）を名乗り、西岸に城を築いた。那珂西の通泰の子孫は鎌倉幕府の御家人となり源頼朝や北条氏に従つた。通泰の弟は那珂東域に館を置き「戸村氏」となる。

通泰の孫・通景は頼朝から名の一字を貰い「頼通」と改名して承久の乱などに活躍しているが、その四代あとの通辰（みちとき）が南北朝時代に北畠顕家に従い瓜連城などで戦つて「南朝の忠臣」と言われている。この頃に小田城の小田治久も南朝方に居たが瓜連城が落ちる前に脱出した。

その時に治久と共に那珂一族の一人である通政も城を抜けた。間もなく小田治久は「南朝方」から「北朝方」になり、那珂通政もそれに倣い北朝軍として戦つた。その戦功として与えられたのが江戸（旧・那珂町下江戸）であり、その地に本拠を移して「江戸氏」を名乗つた。

江戸通政の子が難台山城攻めに討ち死にした通高であり、残された息子の通景が鎌倉から河和田などの領地を貰つたのである。父親の保険金を受け取つたような通景は早速、本拠を河和田城に移したのだが、直ぐ近くにあるので水戸まで欲しいと思うようになった。やがて通景の子・通房は大

掾氏の没落に便乗して水戸城まで手にすることに
なり、大掾氏は「棚のぼたもち」になる。

ここで終わると大掾氏が気の毒になり、府中こ
と石岡が負けのような印象を与えてしまうので、
江戸氏の没落についても触れておくことにする。

江戸氏は、難台山の合戦で水戸近郊の領地と河和
田城を手に入れたあと「上杉禪秀の乱」でも上手
く立ち回って発展を続ける。その辺のことは「興
亡の連鎖」で述べるが、結果的に水戸城も手に入
れて七代・百数十年に亘り水戸を支配した。

しかし天正十八年（一五九〇）に佐竹義宣が府中
城を陥落させ石岡の町を焼く前に、水戸城は佐竹
に攻め込まれた。最後の城主・江戸重通と息子の
實通は脱出して千波湖で自殺しようとしたのだが
長老に止められ、縁故を頼って結城に逃れた。

徳川家康の時代になって結城家は越前福井に国
替えとなったので、江戸氏もこれに従って福井へ
移ったと言われる。そして江戸に幕府を開いた徳
川家康に遠慮して「江戸」の姓は名乗らなかつた
そうである。その代わり「水戸」姓を使ったと伝
えられるが、水戸の地名は大掾氏が付けたとい
う説もあるから、こじつければ江戸氏が大掾氏に屈
伏したと考えられないことも無い。

唐突な話だが、建久元年（一九〇）、源頼朝が上
洛した時に供奉行列に加わった際の常陸国の武将
は多氣大掾が前衛の六十騎中五十一番、江戸氏が
三十五番と二十一番、佐竹氏が二十八番、後に石
岡へ来た大掾系の馬場氏は九番であった。先陣で
あるから番号の多いほうが頼朝に近いことになる
のである。小田氏は側近の八田氏系なので、番号
無しで頼朝の直ぐ後に従っている。注目すべきは
新参の江戸氏が二人の武将を出していることでや

はり努力をしないと武士団でも生き残れないので
ある。勝者と敗者には何かの違いがあった…

コーヒーブレイク

唾液の効用

菅原茂美

人間の体は、言わば一本の管（くだ）のようなもの。
基本的にナマコ（海鼠）と同じ、口から肛門まで、一本
の管で、できている。雨樋、土管、トンネル等いずれも、

ス

ムズに、内容物が通過しなければ、エライことになる。
さて人体でも、その管の中を食べた物が、消化吸収後、
不要物を順調に排泄できれば、まさに健康。その潤滑
油の作用するのが唾液。

その唾液が、心理的に好ましい雰囲気なら潤沢に分
泌される。逆に緊張や憎しみなどネガティブな雰囲気
なら、唾液腺の血管が収縮し、唾液は、スムーズに分泌
されず、胃痛等不健康の元。

南米のアルパカ（ラクダ科）は、攻撃相手の目を狙っ
て唾液を飛ばすが、人は和やかな談笑中は、唾液の分
泌が促進される。

人類は野生時代から、雄はライバルや猛獣との戦い
など緊張の連続。現代も企業戦士等、心休まる暇がない。
その点、雌は幼子に接し笑顔が絶えず、仲間との談笑
も多い。男が女より長生きできない遠因の一つは、こ
の辺にあるのかも…。

そこで名（迷）医の処方箋。動物は唾液タツプリ、傷口
を舐めて治す。人も動物。唾液で傷心が治らぬはずが
ない。男女の唾液交換（ティープキッス）は傷心を癒す
特効薬。活力の源。天祐神助のその相手？… それは、
自分で探さない。

【特別寄稿】

オカリナ（土笛）の魅力

野口喜広

昨今、オカリナ（土笛）ブームが再燃し始めてい
るようである。とはいってもまだ静かなブームで
あることには変わりはないが、ネットの拡大で若
い人までもオカリナに興味を持つ人が増えている。
さらに今年から初めてオカリナ専門雑誌が刊行さ
れたこともオカリナ愛好の人口が着々と増えてい
ることを伺わせる。そろそろNHK教育テレビ等
で「オカリナを吹こう！」なんていう趣味の番組
が企画されてもおかしくない気配である。

このブーム、日本だけにとどまらず、アジア各
地においてもいえる。特に台湾にはオカリナの専
門店が都市や観光地、あちこちに点在する。馬大
統領もオカリナの大ファンで一万人規模のオカリ
ナ大会のスポンサーにもなっている。

オカリナ文化の発祥は、イタリアをはじめとす
るヨーロッパではあるが、アジアはそれをしのぐ
勢いで広まりつつある。それは経済が豊かになり、
心のゆとりからくるもの。また二千年以上も昔か
ら続く土に触れる文化（農耕文化）の影響で、アジ
アの人々の遺伝子に刻まれた土のぬくもりに土の
響きが共鳴し、心安らぐのであろう。

オカリナの音色の好みにおいてもその国のお国
柄、風土や人の気質が反映される。ヨーロッパで
は乾いた明るい音色、日本は愁いを帯びた繊細な
音、台湾では主張のある大きな音が好まれている
ようである。

さて、このように近年急速に広まりつつあるオ

カリナには、他の楽器にはない魅力があるのである。

先ずは非常に安価であることがあげられる。誰にでも手軽に手を伸ばせる値段段であることは大きな魅力である。フリユート、クラリネット等はバイオリンほどではないが、矢張りチョットした音色を求めると百万を越す資金を用意しなければならぬ。

次に音色である。オカリナの音色は安らぎである。ノイズの少ない清らかな音に心が洗われるという声もよく耳にする。オカリナは閉管楽器であることから、まるく包まれた優しい音がする。閉じたまるい音は聴いていて非常に心が落ち着く。それは、遠い生命の記憶の音だからなのである。と私は思っている。太古の昔、人類が動物から身を守るために生活していた洞窟の中で聴いた音であったり、母親の胎内で感じた音であったり、風や川のせせらぎや潮騒の音であったりする。さらに生命の根元である土の音の響きが、安らぎを増幅させてくれる。オカリナはまさに1/f (f分の1)の揺らぎの音、自然界の音そのものなのだ。今から二十年ほど前、自然回帰という言葉がはやったが、自然回帰の音そのものといえるだろう。最後に、誰でも手軽に吹けるオカリナの魅力をもう一つご紹介しましょう。オカリナ演奏の時の指の動きや、オカリナをくわえる事で発達する口の周りの筋肉は、人間の脳の働きを活性化させてくれる。加齢による認知症予防に役立つのである。高齢化する日本社会においては、この素晴らしい楽器、オカリナの更なる普及が望まれます。

【風の談話室】

先月、会報9月号を各所に配布して間もなく、当会にとつては大変嬉しい読者の方からのお便りを頂いた。お便りの内容は、当会報の編集責任者への苦言と言えるものであったが、苦言を頂ける程この「ふるさと風」をご愛読いただいているのだと、会員一同感激いたしております。

読者からのお便りの内容は「違う土俵の人が違う土俵にやって来て、違う尺度の話しを、物語性の欠いた知識だけを振り回して行った。変な風が吹きましたね」というようなものであった。

これは8月号に鈴木氏が書いた話しに対して、「志田氏が個人的に畚書房の太田氏に宛てた感想としての意見」を、太田氏の意向を受けて9月号に掲載を了承された文に対しての読者の感想である。志田氏の文を読んだ時、小生も違和感を覚えたのであったが、太田氏に掲載の了承をしたというのは、その文が自分の作品として発表しているという覚悟を持つての事であろうから、そのまま掲載させていただいたのである。

当会の編集の基本は、「どのような内容・意見であっても、投稿頂けたものは必ず掲載する」であり、自分達に不都合だから載せないという事は決してしないことにしている。そのかわり、その文に対して賛成しかねるだとか、異議があれば、それも必ず掲載することになっている。それで、志田氏の文に対して些か違和感を持ったので、小生、編集者を離れ、少し感想を述べたのであったが、お便りを頂いて、小生自身の感想の述べ方に反省をさせられたのであった。

文作屋にとつて、どんな場所においてであつても己の文を発表する時は、それが自分の作品であるという責任を負うというのは、不文律の決まりである。当然、志田氏にも文章を発表している以上そうした認識はあると思うのだが、文章を書かれた経緯を考えた時、その文章のままを受け、作家としての評を書いて果たして……と思つてしまひ、志田氏の文作の経緯を気づかう事をしてしまった。しかし、読者の方を甘く見た訳ではないのであるが、小生の評論が評論で無くなつてしまつている事をズバリ指摘されてしまつた感じのお便りであつた。

小生の志田氏に対する論評を、経緯を考慮するなどという卑猥な精神を捨てて、「権威づくで物語性の欠落した粗さがして、これでは作品の論評になつていない」と誌していれば、「違う土俵の人が違う土俵にやって来て、違う尺度の話しを、……」というようなお便りを頂くことはなかつたし、志田氏に対する妙な偏見を与える事はなかつたであろうと、小生反省しきりである。

しかし、これは当会にとつては有難く、近年稀なる愉快である。当風の会が掲げている、悪口でも大声で叫べば「ふるさと」の自慢」になるを益々に自信を持つて実践していかなばならないと勇気づけられるお便り、有難うございました。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第26話

難台山城 落城哀歌

11月12、13、14日(午後2時開演)

「たとえ命落すとも、そなたを思い、子を思う我が心は消えぬ。狐に姿をかりても必ずや逢いに参らむ。子忍の森に我を待て！」 鴨長明の「方丈記」に導かれて、難台山城の希望なき争乱の影に残された武将の妻の哀歌を、手話の舞に舞う。

古里に生まれた新しい舞台表現「朗読舞」の女優小林幸枝が

舞の表現スケールを益々にアップして、常世の国に語り伝わる

南北朝争乱の秘話を舞い演じます。

生涯学習として平家物語全句朗読に挑戦する
兼平良雄(ことば座特別研修生)第二回朗読会。

「平家物語第百二句 扇の的」同時上演。

脚本：演出 白井 啓治
音楽：効果 野口 喜広 (オカリナアート JOY)
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗 読 しらみひろぢ
舞 技 小林 幸枝

入場料3000円(中学生2000円 小学生1500円) 入場券は、ギター文化館 0299-46-2467
いしおか補聴器 0299-24-3881にて取扱っております。

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎募集要項
- 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
 - 募集人員：6名程度(最大10名まで)※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
 - 養成期間：1年間(入塾は随時受付しています)
 - 指導月4~6回
 - 受講料：月額30,000円(全・半納割引有り)
 - ※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当：白井)までお問い合わせください。